

コラム

目に焼き付ける記憶

「人はなぜ「見たい」と思うのか」

(二〇一五年五月二十四日執筆 文章内は敬称略)

執筆・石川 享佑

コンタクトレンズ

毎朝、コンタクトレンズを目に入れるのが苦痛で仕方ない。僕ではなく、息子の話だ。

うちの息子は、五歳のときに斜視と診断された。親の僕では全く気づかなかつたわざかな歪みを眼科の先生はすぐに見抜いたから、すごいなと思ったのを覚えている。保育園の眼科検診で判明したんだった。息子の親権を取り戻して、僕の母が勤めていた保育園に入園させてもらっていた最初の眼科検診だったと記憶している。

息子とは、三歳のときに一度、別れた。最初の妻と離婚する際に最後の引越を手伝つたときのこと。家具

や家電を揃えて、2セトラックで何往復かしたんだった。「最後だから」と、少し遅めの昼食を取つて、最後の別れを告げたとき、息子はかつてないほどに大泣きして、駄々をこねたんだつた。飲食店の駐車場で寝転がつて泣いている息子を見て、一度抱き上げて「また、すぐ会えるから」と言つて車に乗せたのが三歳の息子を見た最後だつた。

あのときの息子の大泣きする姿は、今でもときおり思い出す。そのときの服だつて思い出せる。息子が気に入つていたカーキの半ズボンに白の半袖のシャツ。青いボーダーが入つていて、色白の息子によく似る。

数日後、息子を膝に乗せてスマートのカメラで自撮り写真を撮つた。息子は「メガネくん」と呼ばれるのが大嫌いだつた。それで「メガネの何が変なのか」と叱咤激励する意味を込めていた。その後、何台もスマホを変える中で、その写真はどこかにいってしまったのだけれど、そこにありがたいことに、見つかつたのが早かっただこともあり、矯正すれば普通の生活が送れるし、手術の必要も無いだろうと言われた。本当に眼医者さんにも母にも頭が上がらない。その日、帰宅したら、メガネ姿の息子がテーブルの前にちょこんと座つていた。僕は裸眼の視力が良い。その日、帰宅したら、メガネ姿の息子がテーブルの前にちょこんと座つていた。僕は裸眼の視力が良くなっている。幼少期の僕にそつくりなその顔が涙で染まるのは、まるで幼い自身の涙を見ているようで、心臓を驚撃みにされたような苦しさを僕の記憶に深く刻み込ませて、今までもときおりシクシクと痛む。それにしても、愚かな父親であつた。

たはずの息子が、急に別人に思えた。思えば、あのときから父子の葛藤というものは始まつていたのかも知れない。

息子を膝に抱いてから、十五年以上 の月日が経った。もうかわいげのなくなつた息子だけれど、朝起きてコンタクトレンズを入れるのに苦戦している姿を見るたびに、かつての自身の愚かさへの呪いの気持ちと、息子への申し訳無さが衝き上がってくる。今では随分と大きくなつた手が、まだ僕の半分くらいしかなかつたときに、どうして離してしまったんだろう。泣いている息子を抱いたときに「泣き止んで」なんて言わずには、泣き止むまで抱きしめてやることがどうしてできなかつたんだろう。

後悔がどんどん湧き上がつてくる

前振り払うようにして家を出る。それでも追いかけてくるかつての無念さから逃げるように自転車を漕ぎながら日盤吉方に向かう毎日だ。

きっとこの痛みは「北斗の拳」のケンシロウの胸に刻まれた北斗七星なのである。息子を守れなかつた過去の弱かった自分に刻まれた傷を、僕はこれからも背負つて生きねばな

らないのである。いや、きっと僕自身が望んでこの傷を残しているんだろう。弱かつた自分を決して忘れることが無く、もっともっと強く生きることができる自分であるために、これだけは忘れてはならぬ記憶なのだ。

カンブリア爆発

コンタクトの話から始まつたが、今月は「見る」ということについてコラムを書いてみたい。本当は四月の九紫火星の月に書きたかったのだけれど、どうにも間に合わなかつたので、リベンジである。

生命が「眼」を獲得したのは五億四千年ほど前。地球が生まれれたのは、七億年ほど時間が経つた三十九億年前とされる。当初の生命はバクテリアや藻類などの単細胞生物ばかりであった。その頃の地球は、

十億年ほど前になつてようやく多細胞生物が出現する。今で言うナマコだとクラゲのような生物が出現し始めたのである。彼らはまだ目を持つていない。見るという手段以外で獲物を捕獲していたのだろうと予想する。

そして五億四千年前、突如として多種多様な生物が出現しはじめめる。それまではフニャフニヤで頼りないような身体しかもたなかつた生命が、急に硬い甲羅に身を包みだし、また、その甲羅を破るような牙を持ち始める。こうした新たな生物がある時期を境に急激に海で活動をはじめるのである。この時期を「カンブリア紀」と言い、生物の爆発的な進化もしくは多様化を「カンブリア爆発」と呼ぶ。テレビ東京系列で「カンブリア宮殿」という番組があるが、その「カンブリア」はこのカンブリア爆発を指している。

この「視覚」を持った生物は、より多くの捕食が可能になり、したがつて盛んに繁殖が行え、繁栄していく。もちろん、他の種もまた視覚の獲得に動き、反撃・逃避能力を備えるようになり、イタチごっこのように進化は進化を呼んだわけだ。つまり生命に大きいなる進化と変化をもたらしたのは「眼」なのである。

進化論で有名なダーウィンも、こ

る。カンブリア紀以前は、眼を持つ生物が全く発見されないので、どういうわけか生命はカンブリア紀以後、みな眼を持つようになったのである。

生物であつても光を感受して運動の方向性を決める。向日葵を見ればわかるように、植物も確かに光を感受している。だけど、光刺激を「像」として結び、映像として形成する力は彼らには存在しない。この光刺激を映像へと昇華させる力を視覚と呼ぶのである。

この「視覚」を持った生物は、よ

り多くの捕食が可能になり、したがつて盛んに繁殖が行え、繁栄していく。もちろん、他の種もまた視覚の獲得に動き、反撃・逃避能力を備えるようになり、イタチごっこのように進化は進化を呼んだわけだ。つまり生命に大きいなる進化と変化をもたらしたのは「眼」なのである。

の眼というものの理解にはなかなか

苦しんだようだ。彼は有名過ぎるほどに有名な著書「種の起源」において、このように述べている。

「比類のないしくみをあれほどたくさんそなえている眼が、自然淘汰によって形成されたと考えるのは、正直なところ、あまりに無理があるようと思われる。」

そうなのだ。眼というのは、あまりにも複雑な器官なのである。キリンの首が少しづつ伸びたというのは、まだ自然淘汰の過程の中の進化として納得できないことはない。象の鼻が伸びたのだって、納得できる。だけど、眼ほどに複雑な構成をしている器官が「徐々に」作られたというのは、どうしても納得がいかないのである。ダーウィンを悩ませ、唸らせたのも共感できる。

我々はもつともっと「眼」を知るべきだと思う。知ることとは、そのまま愛することだと思う。愛するほどに、知りたいと思う。身体を知ることは、そのまま身体を

愛するということなのである。

現代人はあまりにも身体をおざなりにしすぎている。無理をしても栄養ドリンクを飲めば良いと考える人がどんどだらう。一度崩れた親子関係が、なかなか修復できないのと同じように、身体もまた薬を飲んだところで完全に修復できるようなものではないのである。

眼の一一番表面にある「角膜」は五つの層で形成される。その最下層にある「角膜内皮細胞」は一度死んでしまうと再生はされない。神絆細胞も中枢に近い部分はほぼ再生はされない。よく「トカゲの尻尾切り」と少しだけ「眼」というものを学んでみたい。

さて、話が逸れてしまった。とにかく人間の身体というのは、もっともっと一般の人も大切にすべきものであり、さらに眼というのは身体の中でもとりわけ複雑で精密であると云ふことを伝えておきたい。「見る」行為そのものを考へる前に、少しだけ「眼」というものを学んでみたい。

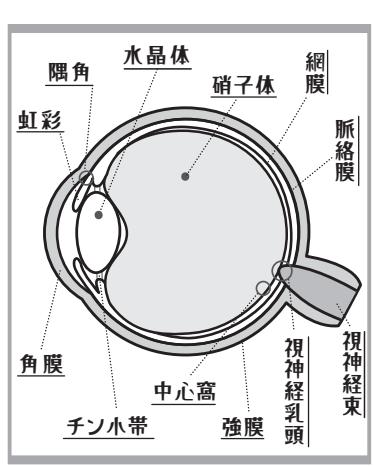
カンブリア爆発から始まった、種の生存競争を生き抜き、靈の長たる存在として地球上をある意味での支配をした人間も、「見る」ことなしに今の地位を築くことなどできなかつたろうと思う。

他の動物の視神經細胞の数などはどうなっているのかと気になつて、少しだけ調べたけれど、信頼にたる数字は出てこなかつた。ただ、おそらく人間の視神經線維の数は、犬や

負つたら再生できないものもあるのである。ちなみにアカハライモリは

幹細胞から諸細胞への分化だけでなく、諸細胞から幹細胞への「脱分化」の仕組みを持つているため、何度も再生できる。この仕組みを人間の再生医療にも応用しようと研究が進められているが、実現するにはまだまだ時間がかかる。

さて、話が逸れてしまつた。とは言ふが、人がいかに「見る」ということを大切にし、目から入る情報を必死に収集しているかということの証左と言えるだろう。



猫よりも多いだらうと予想している。

もう少し丁寧に眼の構造を書いてみたい。まず、最初に光が侵入するのが「角膜」である。これは黒目と理解してもらえばいい。レーシック手術はこの角膜にレーザーを当て角膜のカーブを矯正し、光の屈折率を調整して近視や遠視、乱視を矯正する。

角膜に入った光が全て網膜に投影されるわけではない。角膜の奥には「虹彩」という「絞り」に相当する器官が存在する。これは「茶目」と呼ばれる部分になる。この虹彩は内部の平滑筋(不随意筋)の働きによって開いたり閉じたりして、眼に入る光量を調整する。この虹彩と角膜の間には「隅角」と呼ばれる部分があり、そこには「シュレム管」と言って眼房水という眼を潤す水分を排出する管がある。だから、この隅角の部分には一定の血圧がかかっている(眼房水も血から作られるからだ)。この血圧を「眼圧」と呼ぶわけだが、

これがどういう訳か高まってしまうのが「緑内障」という病気だ。今

ところ、まだまだはつきりしてない病気であるが、「眼」であり「血圧」が関与しているのだから、九紫火星の病気で鑑定すれば良いんだろう。何年か前の認定講師試験でも緑内障の象意を問うような問題が出たと聞く。氣学の鑑定をする人は、こうし

た身体の構造と病気の機序を知つておいて損は無いと思う。

さて、虹彩の内側を通過した光は水晶体に入る。ここも角膜同様に光を屈折させる部分で白内障はこの部分が加齢によつて濁ることで起こる。白内障の手術は、水晶体の濁つた部分を超音波を用いて吸い出し眼内レンズを入れる。こういうところは「西洋医学すげーな」と感嘆させられるところである。ちなみに、水晶体は若干黄色がかっている。これ

は写真が好きな人で、以前はデータや旅行の際には常に一眼レフカメラを持ち歩いていた。最近はもっぱらスマホのカメラだけれど、小さい身体で構える大きなカメラのギヤップが可愛らしくて、その姿にいつも見惚れてしまつていたのを覚えている。だけど、実は我々はさらに高性能の一眼レフをその身体にすでに持つているのである。僕は昔から目が良く、未だに裸眼で1.0以上あるもんだから、こうした「目」の持つ凄さをあまり氣にも留めていなかつた。だけど、やっぱり自身の身体に感謝しなきゃいけないな。

水晶体は「チン小帯」という帯で吊るされていて、このチン小帯が水晶体を引っ張つたり緩めたりすることで水晶体は薄くなつたり厚くなつたりする。近くを見る時は分厚くなつり、遠くを見る時は薄くなる。だから、水晶体はカメラのレンズに例えられることが多い。

水晶体を通過すると、光は硝子体を通過する。「硝子」と言う通り、コラーゲン線維と水でできたガラス

のような透明な部分だ。目の体積のほとんどを占めるこの硝子体も光を屈折させる働きを持つが、それ以上に眼球の形を保つために必要な器官である。この硝子体がまんまるだからこそ、我々(に限らず動物全般)

は眼球を色々な方向に動かすことが可能になる。この硝子体のさらに奥に「網膜」があり、ここに光が到達して投影される(カメラのフィルムのようなもの)ことによつて、はじめて我々は光を「像」として認識できるようになる。

この網膜からは視神經がたくさん伸びていて、受け取つた映像を脳へと送る。とりわけ「中心窩」という領域には椎体細胞が集中しており、高度な色彩の認識を可能にしてくれている。この「中心窩」から少し離れたところに「視神經乳頭」という神経が集まつて膨らんでいる場所があるのだけれど、この領域だけは「見えない」場所である。俗にいう「盲点」

を作り出してしまうのが、この部位なのだ。これは構造上、どうしてもできてしまう場所で、すなわち人間にとっては、誰しも「盲点」を持つているのである。日常生活で盲点が気にならなければ、どちらかの目の盲点の部分を逆の目の視覚で補つているからである。もつと言えば、「見えないものを見えたように、脳がごまかしている」のである。

さて、この網膜を覆うのが「脈絡膜」だ。別名「ブドウ膜」である。写真を暗室で現像したことがある人なら分かると思うけれど、光が入ってしまうと像をフィルムに現すことしかできないのだ。だから、網膜を暗闇の中に閉じ込める必要がある。そのための暗幕を人体はどうやって作るかというと、なんと「血液」でカーテンをするという技に出たのだ。目は血でカーテンを閉めて、眼球の中を真っ暗にして、網膜に像を焼き付けている。もう「眼に足を向けて」眠れないな。そもそも眼に足を向けて寝ることができるかどうか。相当

に身体が柔らかい人ならできるだろうが。血で作った葡萄色のカーテン。それが脈絡膜である。

この眼球を守るために、一番奥に存在するのが「強膜」である。この「網膜」「脈絡膜」「強膜」の三層構造で眼を覆っているのである。

この三層の膜を貫通するようにして走るのが視神経だ。視神經は後頭葉にある大脳視覚野に向かって伸びる。前についている眼の神經が後頭部にあるのがどうにも不思議だ。しかも真っ直ぐ走るのではなく、視交叉といつて、眼のすぐ後ろで交差してしまうと像をフィルムに現すことしかできないのだ。さらに驚くのは右眼が球に、左視野は右半球にと伸びる。それゆえに下垂体腺腫などで視交叉の中央部が障害されると両耳側半盲（右目も左目も外側半分が見えない）という現象が起きる。どうしてこうも不思議な構造を作ったのか。以前、お笑いコンビ「ガンバレルーア」の彼女は代謝異常（下垂体は成長ホル

モンを分泌する）と視覚の異常で病気につくことができたと言う。もしかして、視神經が交叉していなかつたら、彼女は半盲ではなく全盲になっていたかも知れない。そうしたリスクを低減させるために、生命は視神經を交叉させることを進化の過程で得たのか。実際のところは分からぬが、生命の進化のロマンを感じさせてくれる。それにしても、よしこは早めに気づくことができ（といつても、腫瘍は3センチに達していたと言ふから）、早期発見とは言えないかも知れないが）失明を免れることもできたから良かった。多忙を言い訳に、身体から目を背けてはならないということを教えてくれたニュースだった。

僕はこう見えて解剖学が好きな人間で、構造を知るほどに人体の凄さにため息をついている。だけど、解剖というのは、当然だけれど「（静止しているという意味で）死んだ」情報だ。實際にはもつと人体は躍動している。それを忘れるとき、人体を見つけては先制攻撃を仕掛ける。見えなければ、人間など野生では何も見つけては先制攻撃を仕掛け。見る人間は生き残ってきた。できるだけ早く敵を見つけ、また敵の急所を見つけては先制攻撃を仕掛け。見えない限りは、外見だけで判断する「見る力、表現する力」

が発見されつつある）。ぜひ、「自分でネットで検索していただきたい」といふが、およそ三万年前の絵画とは思えない正確さで、狩りで得たであろう鹿や馬、牛を描いている。明らかに古代の人々は「見る力」が高く、しかもそれを正確に表現する技法を持つていた。

日本でも縄文時代早期の「女神像線刻礫」（愛媛県・上黒岩岩陰遺跡）など一万年以上前の壁画が発見されている。紀元前一世紀には色も使われている遺跡も発見されている（愛知県・一色青海遺跡の鹿の絵画土器）。さらに時代が下れば七世紀や八世紀になるとキトラ古墳に代表されるような美しい壁画が描かれるようになる。

こうした絵画によって、人は自身の見たもの（実際に見たかどうかは別として）を「他者に」「正確に」伝えられるようになつた。

ところが、歴史上最も古い壁画が発見されたヨーロッパでは、「見たものを正確に写し取る」という行為

がある時点でストップする。キリスト教の「創造は神のみがなせること」という考え方の影響により、絵画におけるクリエイティビティというのはほとんど失われてしまつたように思う。

作品であって、その頃、彼は白内障に苦しんでいたというから驚きだ。人間の「見る力」、そして「見たものを保存する力」というのは、確かに人間が進化するのに欠かせなかつた。

プレパラートは数十種類もあつて、赤ん坊の骨細胞とか、膀胱の細胞だとかもあつた。血液のプレパラートは僕を大いに興奮させてくれた。膀胱は「移行上皮」という珍しい形の上皮だから、それも面白

そうした停滞を打破したのが「ルネサンス」である。ヌードを解禁し、人を人らしく、創造的に描くという行為を取り戻したヨーロッパは、停滞した期間を取り戻すかのように「写生」に没頭する。レオナルド・ダ・ヴィンチなどの天才を経て、西洋の「写生」は印象派に結実する。

「目が！ 目があああ」と苦しんだの
オバサンばかりだった。みんなして
のグループは僕を含めてオジサン、
数名いたのだったが、どうしてか僕
業があった。僕のクラスは社会人が
で覗いては、スケッチするという授
ときには、人体の色々な細胞を顕微鏡

かつた。赤ん坊の骨細胞は大人のそれとは全然違つて、瑞々しさを感じさせるものだった。ちなみに大人の骨細胞のプレパラートは、枯れ木にしか見えないようなものだった。赤ん坊の骨は代謝が非常に活発だから、瑞々しく見えたのだと思う。

また、他の先輩方のスケッチも目

器）。さらに時代が下れば七世紀や八世紀になるとキトラ古墳に代表されるような美しい壁画が描かれるようになる。

印象派の代表であるクロード・モネは、おそらく人類で最も「正確に視覚を写し取った画家」であろう。「睡蓮」に代表される彼の画は、も

を覚えている。比較的、目が良かつた僕は、さっさとスケッチを終えた課題となっていた数種類のスケッチを終えた後は、特にやることが無くな

せてもらつた。ものすごくリアルで、本当にプレパラートがそこにあるとうにさえ思えるような人もいた。「何で美大じやなくて鍼灸学校に来てる

こうした絵画によって、人は自身の見たもの（実際に見たかどうかは別として）を「他者に」「正確に」伝えられるようになった。

はや「写真」と言つていいくほどに光
を正確に捉えているように思う。い
つだつたか、妻と出かけた美術館に
モネの画が展示されていて（レプリ

なってしまった。先生は「もう単位はあげるから、授業に出なくてもいい」と言つたけれど、どうせ、その後も授業があるから帰るのも面倒く

ところが、歴史上最も古い壁画が発見されたヨーロッパでは、「見たものを正確に写し取る」という行為

力だったかも知れないが）、そのリ
アリティに圧倒された。

さい。そこで、教室にあつた別の細胞のプレパラートを見ては、スケッチして楽しんだ。

けれど、それまでのことで。僕のセミナーを受けた方は分かるだろうけど、絵のセンスはほぼ無いに等しい。

もし、絵のセンスがあれば、もう少し身体の構造の理解も早く進むんだろうけれど。まあ、顔が良いからいつか。

人はなぜ見たものを記録したがるのか

モネによって「見たままに写し取る」という技法は完成された。それ

れも実際に外界に存在したものではなく、内面に存在したものを確かに作者が見て、それを表現したのだ。そう考えると、東洋の美術というのは、西洋のその何百年も先を行つていたのか。仏教藝術というのもつともつと評価されるべきだと田わざにはいられない。

そうた、モネは「光を捉え描いた人」と述べたけれど、「雨を捉えて描いた最高の人」は歌川広重だと妻に教えてもらった。妻は大学で美術史（西洋）を専攻していたから、こうした分野に非常に明るい。だから、妻と美術館や博物館に出かけるのは楽しいのである。そういうえば一番最初のデートは長崎の県立美術館だつた。そのときは「クリム・ト」の展示

が行われていて、有名な「接吻」を見て感動したのを覚えている。

そういうえば、曼荼羅なんていうのは、ある種、宗教者の内面の表現と言つてもいいのではないか。何年か前に高野山に行つた際に、胎藏曼荼羅と金剛界曼荼羅を見たけれど、あ

話が逸れてしまつた。外界を見て
映し出す技法がモネ以降、あまり興味
が持たれなかつたのは「カメラ」
の登場もあると思う。このカメラと
いうのは、実はその原理はアリスト

テレスの時代には既に知られていた。実用化されるのは、それから随分と時間が経った十九世紀の欧洲最初に成功したのはフランスのジョゼフ・ニセフォール・ニエプス。その後はアリストテレスもびっくりのスピードで進化を遂げ、その時代をフィルムに収め続けてきた。ニエプスから170年もするとプリクラなんていうものが流行り、女子高生の「プリ帳」を写真で覆い尽くすまでになった。そしてニエプスの成功から約二百年となる現代は、手のひらサイズのスマホの中に、超高機能のカメラが内蔵され、そのおかげで僕は日々、愛猫の愛くるしい姿を映し出すことができるようになつている。

とにかく「光学」が西洋医学を発展させた。顕微鏡で細胞を見るようになるまで、西洋では「とにかく瀉血」というのが医学のセオリ一だった。それが細胞を見ることによって、細菌群を発見し、その構造を理解し、最適な薬を合成するようになったのである。今ではさらに小さなウイルスまでをも見ることができ、四百種類にも上るウイルスのゲノム配列まで見つけ、全てをデータサーバーに記録している。

記録している。

く「記録に残す」というのは、本能的な欲求なのかも知れない。もちろん、こうした文章を残すのもまた、同一の欲求なのだろう。僕は絵で記録を残すのが苦手だから、こうして

文章を書き殴りつづけているのだろう。

しかし、なぜ人は本能的に記録を残そうとするのか。僕にはとてもではないが答えなど出せそうにないが、もしかしたら人は「永遠のいのち」というものをどこかで信じている

るのではないか。

僕のいのちは永遠なのである。肉体は当然有限だけれど、いのちそのものは不滅なのだと思う。遺伝子に引き継がれ、そのまた子どもにと続していく。ここまで学んだ氣学や易学、さらに東洋医学は、受講生の皆さまや読者の皆様、また当社のスタッフやまだ見ぬ未来の従業員たちが引き継いでくれるに違いない。彼らの中で僕が生きることができれば、僕のいのちは不滅なのである。

だとしたら、僕の肉体がこの世から消え去っても、どこかに僕のいのちは必ず転がっているはずで、僕はそうした未来の僕へと手紙を残すかのように、こうして文章を残していくのかも知れない。

もつと言えば、人類は「忘れられるのが怖い」のではないか。作詞家の故・永六輔は「人間は二度死ぬ。一度目は肉体が滅んだ時。二度目は人々の記憶から消え去った時」という言葉を遺した。一度目の死は避け

らない。その恐怖を克服するためには、人間は宗教を生んだ。二度目の死を避けるには、自身の死後も何かしら「自分が生きた証」が残れば良い。そう考えると、人間は二度目の死の恐怖の克服のために、本能的に記録をし続けるのだろう。

デジタル化は記録を劣化させずに保存することを可能にした。僕の執筆した「占いで知る！ココロとカラダのヒミツ」と「いのちのスケッチ」（天地人三部作）に関しては、国会図書館に入っているから、日本国が無くならない限りは保存される。おそらくデータ化されていることだろう。とりあえず、二度目の死は訪れたときに済むんだろうか？

さて、随分と長々と「見る」「記録する」ということを述べてきた。

この「見る」というのは、すでに述べたように九紫火星の働きである。

一九四五年に被爆した長崎で撮影された少年におんぶされた男の子（当時三歳）の写真。戦争の悲惨さを現代に伝える重要な写真の一枚だ。二〇二二年、実に七十七年経つ

紫火星の働きであり、そして九紫火

星には「祈り」「信仰」の意味があり、また登場するのは最も遅れているから「最高」の意味がある。

つまり、人間の見る力、記録する力というのは、最高の力なのである。この最高の力を存分に活かして、我々はより良き世の中を作っていくかねばならぬのである（念の為に申し上げておくが、この一節は決して盲目の人に対する貶めるような意志も、また晴眼の人が優越感を持つのを推奨することを意味しない。僕は鍼灸師という職業柄、盲目の人に対する非常に強い尊敬心を持っているから、その点は誤解なきようお願いしたい）。生命が獲得した「眼」という九紫火星の力。同じく九紫火星の象意であるのが実は「核兵器」だつたりする。

月刊気学のインスタグラムでは出張中の飲食を載せてますが、変えないとね。

@gekkan_kigaku



て、そのご本人が名乗り出た。かつて、おぶわれて戦火を目の当たりに

した竹本秀雄さんは、インタビューの際に「あのかわいい目はどこに行つたんじやろうか…。七十七年間、いろんなものを見てきましたから」と語ったのは記憶に新しい。

人類の叡智でもある「核エネルギー」が映し出すのが、荒廃した都市と悲しみに暮れる人々で良いのかも。九紫火星は光の輝きのはずなのに、僕はある写真に光を見いだせない。こんなものを見るために、人類は眼を獲得し、進化させてきたのか。夏の日差しの下、かつての愚かな殺戮を悔い、希望の光を見出す世界になることを祈りたい。